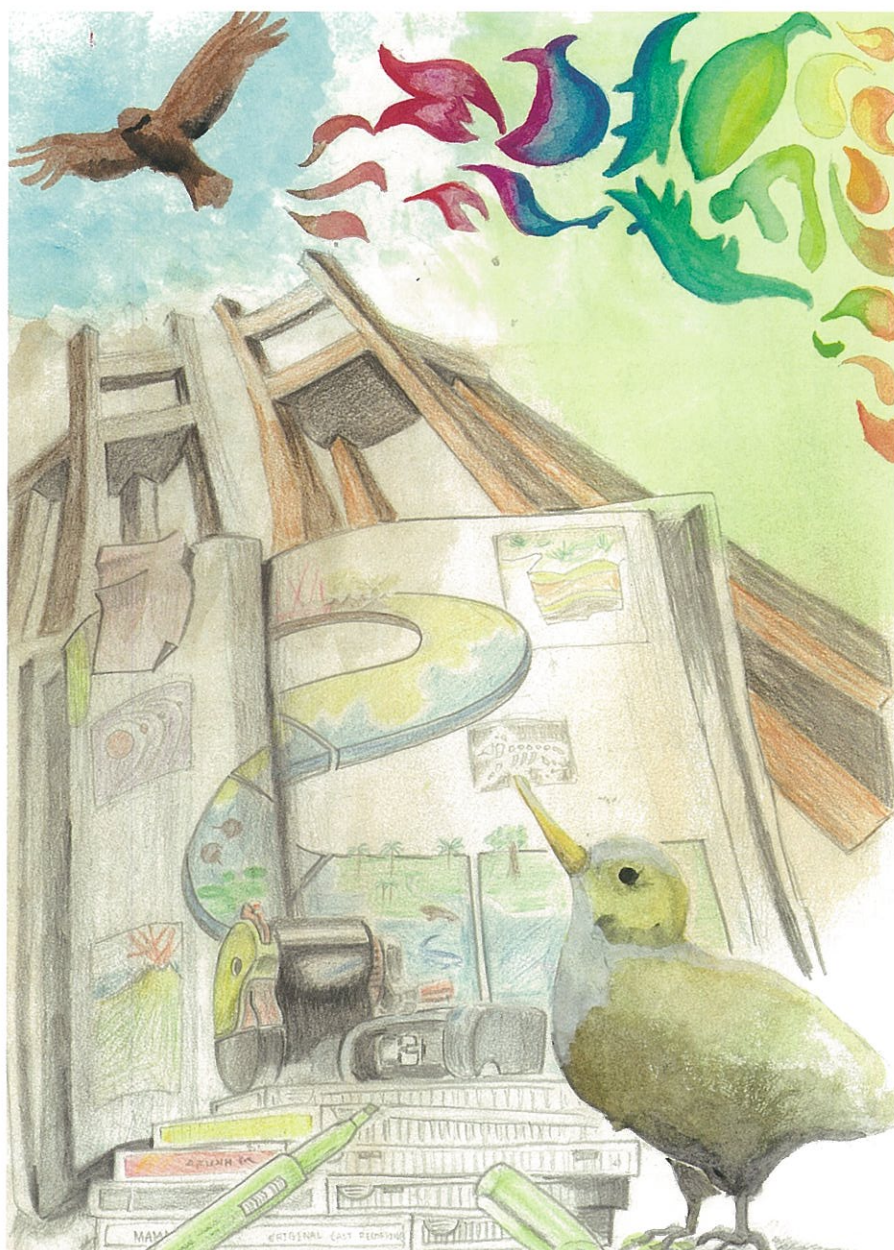


ポローニア

paulownia

vol. 32



絵:「空高く」 稗田葉月(附属中学校3年)

目次

- 2 教育局次長挨拶
巻頭言「その先の、もっと先まで」
◆甲斐雄一郎
アフリカ研修生を受け入れて
◆西垣昌欣
- 3 特別支援教育研究センター 設立10周年
◆左藤敦子
- 4 体験学習を通しての幼稚部親子交流
◆高見節子/加藤 敦
歌って踊って、科学ショー
ー特別支援と普通附属の生徒間交流ー
◆吉田哲也/早貸千代子/安達敬子
- 5 わくわくどきどき修学旅行!
◆後藤 健
「生徒が主役」附属中学校
秋季大運動会
◆小山 浩
- 6 高校生による国際ESDシンポジウム開催
◆建元喜寿
6年目を迎えた日中交流
◆菱沼聖子
- 7 全国アビリンピック愛知大会
【歯科技工競技】開催
◆奥野功三
若桐祭 ～桐の葉書でエアメール～
◆盛山隆雄
- 8 第9回「科学の芽」賞
表彰式・発表会について
◆松本末男





KUICHIRO
KAI

その先の、もっと先まで

附属学校教育局 次長 甲斐雄一郎

スーパーグローバルハイスクール (SGH) に採択された諸活動に立ち会う機会に、思いがけず背筋が伸びるような経験をする場合があります。その一例がSGH運営指導委員会でうかがった、委員の一人による「グローバル」の意味づけの途方もない奥行きです。

深刻なウィルス感染症の蔓延に苦しむ地域がある。その解決に向けた薬の開発を目的として種々の交渉を経てウィルスを採取し、知識や技術を総動員して新薬を開発する。しかしその経費は莫大なものにならざるをえず、売値も高額になるために、疫病が猖獗を極めていいる当の地域に還元することができず、結果として現地からはウィルスを搾取しただけのことになってしまう…そのようなこともまたグローバルということの持つ問題の一面だ、という話です。

グローバル人材にとっての語学力や交渉力、知識や技術の重要性は言うまでもありません。しかしこの話からは、新薬開発などの成果をゴールとするのではなく、それを適用した所期の問題の解消・改善に至るまでの構想力と実行力も、その重要な資質として受け止めることが可能でしょう。そのこととあわせて思い起こされるのが昨年度、筑波大学開学40+101周年企画の一環としてうかがった、ロボットスーツHALの開発者・山海嘉之先生のお話です。先生が強調されたのは、ロボットスーツの完成それ自体が目的なのではなく、直面している社会的な課題にどう取り組むか、というところにポイントがある、ということだったと記憶しています。

新薬やロボットスーツの開発、それらは私たちの感動や尊敬の気持ちを喚起します。しかし当のご本人たちはもっと先までを見通して自らの仕事を検討し、新たな課題を見出し、その解決に挑戦しようとしているという点において共通しているように思われるのでした。

◆ アフリカ研修生を受け入れて ◆

附属桐が丘特別支援学校 副校長

西垣昌欣



今年度、我が校には世界25か国の方が見学・研修・交流等に訪れました。できるだけ多くの方に我が校のことを知っていただきたいと願っていますので、これほど多くの国の方にお越しいただくことができ、本当にうれしく思います。中でも研修生の受け入れは、研究成果の発信、指導法の紹介、そして児童生徒の交流体験、の3つを一度に叶えるとても有意義な機会と捉えています。

さて今回ご紹介するのは、11月25日から28日までの4日間、本校が受け入れたアフリカ研修生についてです。ここ数年、毎年「JICAつくば」を通じて来日する海外研修生を、本学の特別支援教育研究センター介して受け入れており、今年度は、ケニア、レソト、マラウイ、ナミビア、ルワンダ、スワジランド、ジンバブエの7か国から9名の研修生を迎えました。

本校に期待される役割は、特に肢体不自由教育に関する情報を提供することです。そこで4日間の研修内容を、施設設備見学、授業見学、講義、演習の4つで構成し、特に障害特性の解説及び授業づくりの理論とその実践が対になるプログラムを組みました。また今回は、授業研究会の様子も見学してもらい、日本式の教師研鑽スタイルとして紹介しました。

研修生の方は本当に熱心で、よくメモを取られていた姿がとても印象に残りました。また教員の児童生徒に対する接し方や指導姿勢に感心され、質疑の際には、どのようにすれば教師が育つのか、教師の意識を高めることができるのか、学校のしくみや雰囲気を変えるにはどうすればよいのか、

といったお尋ねが多かったのも印象的でした。今回の研修で何かヒントを得て、自国の教育現場が抱える課題を克服していきたい、との強い想いが伝わってきました。

研修の最終日は、小学部1・2年児童との交流会で締めくくりました。大柄な体格の研修生を前に、小さな児童が司会を懸命に務め、クイズやゲームで楽しみ、最後に歌「ふるさと」と記念品（ペン立て）をプレゼントしました。「ドキドキしたけど、司会がうまくできた」「アフリカの大きなお肉の話、おもしろかった」など様々な感想が児童から聞かれましたが、「場馴れして堂々とできていた」という担任の感想が頼もしく聞こえ、海外の方と接する機会を積み重ねていることが、着実に子どもたちの力にもなっていると実感いたしました。

今回の研修が、帰国された先々で少しでも役立ててもらえれば幸いです。



特別支援教育研究センター 設立10周年

特別支援教育研究センター 准教授

左藤敦子

平成26年12月14日(日)、筑波大学東京キャンパス文京校舎にて、特別支援教育研究センター設立10周年記念セミナーが行われました。附属学校および人間系障害科学域の教員をはじめとし、歴代の現職教員研修生や教育委員会関係の方々、特別支援教育研究センターを支えてくださっている多くの方々、総勢150名あまりの方々に参加いただきました。副学長の阿江通良先生からの祝辞を幕開けに、国立特別支援教育総合研究所理事長穴戸和成先生のご講演、シンポジウム(初代センター長齋藤佐和先生、第2代センター長前川久男先生)、事業報告(現職教員研修、教材・指導法データベース)、祝賀会を無事に終えることができました。ありがとうございました。

「特殊教育」から「特別支援教育」への時代の転換期に、特別支援教育研究センターは設立されました。穴戸和成先生や齋藤佐和先生のお話を伺いながら、特別支援教育研究センターがどのような期待を背負い、どのような使命を担って設立されたのかに思いをめぐらす機会を得ました。前川先生のお話からは、子どもたちと真摯に向き合ってこそその教育であることを改めて噛み締めた方々も多かったのではないのでしょうか。

事前に打合せをしていたわけではなかったようですが、奇しくも穴戸和成先生と前川久男先生の資料に大村はま先生の「優劣のかなたに」が挙げられていました。センター10年という節目に、お二人の先生が同じ詩を取り上げようとなさっていたことに、この詩のこぼれ重みを感じましたので、ご紹介させていただければと思います。

〈優劣の彼方に〉

学びひたり
教えひたり
それは 優劣のかなた。
ほんとうに 持っているもの
授かっているものを出し切って、
打ち込んで学ぶ。
優劣を論じあい
気にしあう世界ではない。
優劣を忘れて
ひたすらな心で ひたすらに励む。

成績をつけなければ、
合格者をきめなければ
それはそうだとしても、
それだけの世界。
教師も子ども
優劣の中で
あえいでいる。
学びひたり
教えひたろう
優劣のかなたで。

優か劣か、
自分はいわゆるできる子なのか
できない子なのか、
そんなことを
教師も子どもも
しばし忘れて、
学びひたり
教えひたっている、
そんな世界を
見つめてきた。

今はできるできないを
気にしすぎて、
持っているものが
出し切れていないのではないか。
授かっているものが
生かし切れていないのではないか。

センターの事業は「研究開発」「教員研修」「理解啓発・交流」「連携・コーディネート」を柱として進められています。本記念セミナーにおいては、新たな10年をみすえて、「教材・指導法データベースの構築」「現職教員研修」について報告させていただきました。どちらの事業も、センターを共通基盤とした附属学校相互の連携協力が欠かせません。特に、「教材・指導法データベースの構築」は、教材情報だけではなく指導法を含む包括的な情報の発信や多様な障害に対応する汎用型のデータベースの構築を目指しております。本記念セミナーでは、「データベース(試作版)」を紹介させていただきました。現在、筑波大学ならではの特色を活かしたデータベースの構築に知恵を絞っているところです。多くの先生方からの積極的な関わりを期待しておりますので、センターの扉をぜひ叩いてみてください。

最後に、セミナーに参加いただきました皆様、そして、セミナー開催にご尽力いただきました多くの皆様に、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。



優劣のかなたに

〈大村はま〉

体験学習を通しての幼稚部親子交流

附属視覚特別支援学校 幼稚部主事 高見節子
附属久里浜特別支援学校 幼稚部主事 加藤 敦

「こんどは、イエローハッピートレインに乗れるかな？」久里浜特別支援学校（以下、「久里浜」と表記）との幼稚部親子交流会が近づくと、視覚特別支援学校（以下、「視覚」と表記）の子どもたちは、久里浜に行くことを心待ちに嬉しそうに話しています。久里浜と視覚の幼稚部親子交流会は、3年目を迎えます。今年度は、三浦海岸での「地引網体験」、視覚での「交流会」、久里浜での「もちつき体験」、スカイプによる「キラキラコンサート」など親子交流会を行ってきました。

特に今年度の「地引網体験」は、海のそばにある久里浜との交流ならではの企画でした。地引網体験は、両校の幼児にとって、初めての経験ということもあり、当日までの事前学習では、「海」「魚」「網」「網で獲る」という4つをキーワードに、両校でそれぞれ、網に触れたり、網を使って遊んだりしながら、地引網体験につながる楽しいイメージを膨らませていきました。当日は、晴天に恵まれ、両校の幼児と家族、現在1年生になった幼稚部の卒業生と家族、教員を含め126名が参加して親子交流会「地引網体験」をしました。地引網体験では、皆で力を合わせ「よいしょ!」「よいしょ!」と掛け声をかけながら網を引き、網が砂浜に上がってくると網の中には、カツオ、サバ、ホウボウ、イカなどたくさんの魚が掛っていました。大人も子どもも、自分達で獲った魚に興味津々で、生きた海の魚を見たり、触ったりしていました。その後、獲れた魚を炭火で焼いておいしく食べました。「魚にさわったよ!」「お魚おいしい!」「海には

いったよ!」などの声がたくさん聞かれました。子どもたちにとって、海で魚を捕まえて、食べるという貴重な体験をすることができました。両校の交流を通して、じっくりと触ることで学ぶ、視覚の子どもたちの様子に、久里浜の子どもたちも、魚に触ってみようとする姿が見られたり、楽しく海で遊ぶ久里浜の子どもたちの様子に、海に入ってみようとする視覚の子どもたちの姿が見られるなど、体験活動を通して子ども同士の学び合いや、支援をする教員同士の学び合いも見られました。

また、今年度は、久里浜の子どもたちが、視覚に公共の交通機関を利用して訪問したことは、久里浜の子どもたちにとっても、また保護者にとっても大きな自信になったようです。電車を乗り継いでの2時間あまりの初めての遠出、そして、初めての視覚で、素材遊びを楽しんだり、美味しそうに給食を食べたりしていました。

親子交流会を重ねる中で、子ども同士、保護者同士の関わりも自然な形で深まったように感じています。今後も様々な形で体験を通しての幼稚部親子交流会を続けていきたいと考えています。



歌って踊って、科学ショー —特別支援と普通附属の生徒間交流—

附属駒場高校では、2年生の総合学習の時間でゼミナール「障害科学：ともにいきる」を実施し、附属特別支援学校の先生・卒業生による講義や生徒間交流などを通して、障害についての正しい理解、共生社会の実現に向けて模索しています。

今回は12月17日(水)に附属大塚特別支援学校で、小学部の児童24名とゼミ生22名が、筑駒科学部5名による特別企画「スライムづくり」「くるくるバルーン」「空気砲」を一緒に楽しむという内容で交流会を行いました。

体育館で挨拶やダンスをしてウォーミングアップをした後、ペアになって好きな色のスライムづくりや大きな輪にしたバルーンを天井まで飛ばしたり、空気砲を作ったり、笑い声が絶えない素敵な時間を過ごしました。

大塚の児童は白衣姿の科学部のお兄さんを「博士!」と呼び、目をキラキラさせながら活動に参加し、シールを貼ったり絵を描いたりした段ボール箱（空気砲）や風船を、最後まで大事そうに抱えていた姿が印象的でした。筑駒生は、児童の目線に立ち、興味関心事に気づき、主体性を尊重しながらふれ合っていました。そんな素敵な眼差しの生徒と一生懸命活動に参加する児童の姿は、ささやかではあるけれど、「ともにいきる」社会において、キラリと光る大切な何かを教えてくれました。

五感をフル回転した異学年交流は両校の児童・生徒たちの表情を優しく、そしてイキイキとさせ、大盛況に終わりました。



附属駒場中・高等学校 教諭 吉田哲也
附属駒場中・高等学校 養護教諭 早貸千代子
附属大塚特別支援学校 教諭 安達敬子

「楽しかったねー」「お兄さん、また来てね。約束だよ」「今度は、ボクたちの音楽の授業で一緒にバイオリンや三味線を弾きたいね」「体育で、デカパンリレーをお兄さんとしていたいな」

●大塚の児童からの声

●筑駒の生徒からの声

「大塚の児童は明るく元気で積極的」「障害を持った人と普通の人たちの間で橋渡しをする存在や今回のような機会が増えていくといい」「世の中では偏見もあると思うが、それを超えて共生していくことは大切である」「交流を重ねていくことで心の壁を越えられ、何か新しい発見ができると思う」





わくわくどきどき 修学旅行!

附属久里浜特別支援学校 教諭
後藤 健

本校では、毎年小学部6年生が晩秋に箱根方面へ修学旅行に行っています。今年度は、かまぼこの里でかまぼこ作り体験、地球博物館の見学、箱根ユネッサン、芦ノ湖遊覧船、大涌谷散策、という行程で行ってきました。児童はそれぞれ興味関心、理解の程度が異なるため、各児童がどこかで必ず楽しめるようにしました。

修学旅行に向けた事前学習では、行き先や活動内容について、実際の活動がイメージできるようにシミュレーションを行い、確認していきました。そのほか、持ち物は何を持って行くのか、服装はどうするか、お土産は誰に何をかうか、楽しみなことは何か、などを各自スケッチブックに整理しました。

行程の移動は全て公共交通機関で、電車、路線バス、遊覧船、ロープウェイ、ケーブルカーに乗りました。混雑を避けてグリーン車や特急を利用したところもありますが、ほとんどは普通車利用のため、一日目に箱根湯本に戻る電車では混雑のため40分も立ち続けました。校外学習のときに座れないこともありましたが、これほど長く立っていたのはさすがだなと思います。

箱根の山を路線バスで移動しているときに、こけむした斜面が車窓から見えると、音楽で学習してきた「箱根八里」を口ずさんだり、ケーブルカーで紅葉した樹木のすぐそばを通ったときに「真っ赤な秋」を口ずさんだりし、同乗していた乗客も自然と笑顔に包まれました。

火山に興味のある児童が大涌谷で噴煙が上がる様子を見て、「見て! もくもくしてる。」と実感できたことや、硫黄泉で黒玉子ができていく様子を興味深く眺め、できたての黒玉子を食べて黄身が黄色いか確かめたこと、ボランティアの方の説明で「酢の木」の葉をかじって「すっぱい。」「にがい。」と味わったことなど、現場で貴重な体験がたくさんできました。

修学旅行から帰ってきて、お土産や写真などを見ながら振り返ると、「ユネッサンの滑り台でこんなふうに滑ったのが楽しかった。」等、身体全体を使って表現していたのが印象的でした。



「生徒が主役」 附属中学校秋季大運動会

附属中学校 副校長
小山 浩



9月。まだ蝉の鳴き声が聞こえ、夏の暑さが残る季節。一方で秋の気配が確実に深まる季節でもあります。そんな中、生徒の歓声がグラウンドいっぱいに響き渡る運動会が、毎年開催されます。

今年度は、60回の記念大会でした。いわゆる還暦を迎えた運動会ですが、第1回が1955(昭和30)年に開催され、幾多の変遷を経ながら受け継がれてきています。第1回以前にも、中学と高校とで合同で開催されていたことが創立百年誌には記述されています。因みに記念誌上での「運動会」の初出は、1945(昭和20)年となっています。

いつ頃から、現在の5色(1組:赤 2組:青 3組:黄 4組:白 5組:緑)のチーム分けになったか、定かではありません。しかしこの60年間、生徒の手で作りに上げてきた運動会であることは間違いありません。当時から引き継がれている運動会準備小委員会、チームリーダー(総帥とも呼称されていた)制。その組織作りから始められる運営システムは、今も健在です。全校生徒による選挙で選ばれた委員長陣3名を中心とした生徒自治が、その土台となっています。この組織運営と教師指導の共同作業により、運動会の良き伝統が連綿と繋がっているのです。



今年の第60回大会は、関野保健体育科教諭の指導の下、総務責任者の町田さん、副責任者の中村くんを中心に運営されました。スローガン「繋」を掲げ、広がる青空の下、生徒達の晴れの舞台が開幕。多くの練習を重ね、怪我や困難を克服し、チーム一丸となってこの日を迎えることができました。

種々の競技やパフォーマンス、勝った喜び、負けた悔しさ。思い通りにいった痛快さ、失敗した無念さ、様々な思いが凝縮された一日でした。

委員長陣や運動会準備小委員会の面々だけでなく、様々な係・委員会、部・研究会等、多くの生徒組織が関わりました。そうした生徒達の様々な想いを乗せ、スローガンにふさわしい、素晴らしい運動会となりました。保護者の方々、先生方にも感謝あるのみです。



高校生による国際 ESDシンポジウム開催

附属坂戸高等学校 教諭 建元喜寿

6年目を迎えた 日中交流

附属高等学校 教諭 菱沼聖子



附属坂戸高校（以下、筑坂）では、2012年からアジア各国の高等学校と協力しながら、「高校生国際ESDシンポジウム」を、毎年開催しています。本年度は、平成26年11月12日にSGHのテーマに掲げているアセアン諸国から、インドネシア・ボゴール農科大学附属高等学校、インドネシア政府環境林業省附属高等学校、タイ・カセサート大学附属高等学校、タイ・ワタナーウィタヤアカデミー高等学校、フィリピン大学附属高等学校の5校が参加。日本国内からは、ユネスコ・Riceプロジェクトに日本代表校として筑坂とともに参加している神奈川県立有馬高等学校も参加して行いました。

シンポジウムでは、ESD（持続可能な開発のための教育）に関連する「課題研究」の成果発表や持続可能な社会づくりのためのアイデアの交換を行いました。司会進行は、筑坂および姉妹校のボゴール農科大学附属コルニタ高校の生徒が担当し、生徒主体の国際シンポジウムの運営を行うことができました。当日の発表、ディスカッションは全て英語で行われ、参加した生徒たちは積極的に質問し、意見交換も活発なものとなりました。

インドネシアから参加した2校は、インドネシア・西ジャワ州の国立公園地域で実施している「SGH国際フィールドワーク」の参加校です。環境林業省附属高校マカッサル校のサイザさんは、国立公園における蝶の減少に問題意識を抱き、地域経済の活性化と蝶の保全の両立について発表しました。また、本校を代表してプレゼンをした大竹春菜さん（3年生）は、国際フィールドワーク中にホームステイをしたステイ先のコルニタ高校の生徒と立ち上げた、ゴミ問題解決プロジェクトについて発表を行いました。これらの成果は、翌13日に筑波大学で開催された「筑波国際農学ESDシンポジウム」でも発表しました。

筑坂は、インドネシアだけではなく、タイ・コンケン大学と連携した日本語教育に関する課題研究、ラオスにおける社会起業に関する課題研究も開始しています。

今後もSGH校として、高大連携のもと、課題研究をグローバルに推進していきます。



6年目を迎えた日中高校生交流事業は、財団法人「イオン1%クラブ」主催、北京市政府の後援により、2014年は日中双方60名、計120名の規模で行われました。日本側は、本校生徒30名のほかに東京学芸大学附属高校15名、市立千葉高校15名が参加し、7月に中国の高校生を招聘、10月に日本の高校生が訪中するという相互交流の形をとっています。

7月9日、中国の高校生60名が北京・武漢・蘇州市から来校しました。翌10日は日中双方の生徒が首相官邸を表敬訪問し、杉田和博内閣官房副長官から激励のお言葉をいただきました。夕方からは麻布にある中国大使館を訪問しました。程永華大使夫妻、岸田文雄外務大臣、外務省アジア大洋州局の下川真樹大審議官をはじめ多くの来賓がご臨席されるなかで盛大な歓迎パーティが開催されました。パーティの最後を締めくくる「大海啊故郷」の合唱は大いに会場をわかせ、そこで得た一体感は生徒にとって忘れがたい思い出となったようです。11日には本校に北京市の高校生30名が来校しました。初めは緊張した面持ちだった彼らもすぐに打ち解け、授業にも真剣に取り組んでいました。放課後は部活動に参加したり、環境問題について英語でディスカッションするなど、充実した一日となりました。その後、2日間のホームステイを経て、中国の生徒は日本の思い出を胸に帰国し、10月の再会を約束しました。

10月8日、台風の影響で予定より2日遅れて北京に到着した本校生徒30名は、万里の長城で北京の高校生との再会を果たしました。翌9日は日本の高校生を代表する「日本小大使」の活動として、北京市政府、日本の外務省にあたる中華人民共和国外交部、日本大使館を訪問しました。北京市政府では王安順市長から歓迎のご挨拶をいただき、小大使団を代表して本校の仲野今日子さんがスピーチをおこないました。中国外交部では、洪磊副局長を表敬訪問し、日本のテレビでもお馴染みの記者会見会場BlueRoomで記念撮影をおこないました。日本大使館では山本恭司公使への質問会がおこなわれ、日中関係に対する熱心な質問が相次ぎました。その後歓迎パーティが開かれ、和田充広主席公使をはじめご来賓の方々と楽しい時間を過ごしました。10～12日の3日間は学校体験およびホームステイで中国の日常生活を体験しました。中国の高校生の学習に対する意欲は非常に高く、生徒にとってよい刺激となったようです。また、ホームステイではそれぞれの家庭で温かい歓迎を受け、ホストの生徒との友情もいっそう深まりました。

多様な活動を通じて、日本と中国はこれからどうあるべきかを考え続けた日中高校生交流。生徒が世界に目をむける貴重な機会となりました。



全国アビリンピック 愛知大会 【歯科技工競技】開催

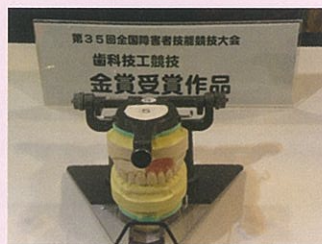
附属聴覚特別支援学校 教諭 奥野功三

11月22日にポートメッセなごやにおいて、第35回全国障害者技能大会（アビリンピック）が開催されました。歯科技工競技においては、1998年の初回開催より本校歯科技工科が中心となって競技運営に携わり、今大会で13回目となります。5時間かけて冠（被せ物）や部分義歯を製作し、歯科技工の技術を競い合います。

スポーツの祭典パラリンピックが障害者のオリンピックであることは広く知られていますが、アビリンピックとは「アビリティ（ABILITY：能力）」と「オリンピック（OLYMPIC）」を合わせた造語で障害者技能大会の愛称として使用されています。大会の目的は「障害のある方々が、日頃培った技能を互いに競い合うことにより、その職業能力の向上を図るとともに、企業や社会一般の人々に障害のある方々に対する理解と認識を深めてもらい、その雇用の促進を図る」となっています。競技種目は洋裁、洋服、家具、DTP、機械製図、電子機器組立て、パソコン操作、義肢、歯科技工、木工など24種目で、大会に参加できるのは身体障害者手帳を所持し、各都道府県知事の推薦を受けた満15歳以上で年齢制限はありません。

ん。歯科技工競技においては、歯科技工に従事している者が対象となりますので、実質は20歳以上となります。これまでの大会において、全国各地で活躍している本校歯科技工科卒業生が各都道府県代表として参加し、過去13回で金賞9名、銀賞7名、銅賞13名の受賞を積み重ねています。

なお、2016年3月にフランスのボルドーで開催されます第9回国際アビリンピックにおいて歯科技工競技が実施されることとなり、今回の大会はフランス大会派遣候補選手2名の選考も兼ねることになりました。国際アビリンピックで歯科技工競技が開催されるのは2007年の静岡大会以来2回目となります。派遣選手は今年度中に決定されますが、フランス大会においても本校歯科技工科卒業生の歯科技工の技能の高さを知らしめてもらえることを期待しています。



若桐祭 ～桐の葉書でエアメール～

附属小学校 教諭 盛山隆雄

若桐祭は、毎年11月に行われる附属小のお祭りです。若桐会というPTAが中心となって企画・運営が行われます。今年も大いに盛り上がりましたので、内容の一端をご紹介します。

毎年盛り上がっているのは、スポーツイベントのドッジボール大会です。各学年でチャンピオンチームを決めるための白熱したトーナメント戦が行われました。校舎内では、何とんでも若桐パフォーマンスでした。子どもたちが講堂のステージ上でダンスや歌、演奏など様々なパフォーマンスを披露しました。

今年の新企画として、桐のハガキを使って手紙を書き、外国に送るというイベントがありました。中にはエストニアの大統領宛てに送った手紙もありました。大統領からはお返事の手紙だけでなく木の葉をいただきました。クリスマスツリーは、エストニアが発祥の地だそうです。

そのほかには、写真や宝物を家から持ってきて缶詰にする「世界に1つだけの缶詰をつくろう」、自分だけの虫を工作してバトルしたり図鑑に載せたりする「ムシバトルinつくば」、早押しクイズでチャンピオンを決める「若桐クイズ王

に挑戦」、「私の好きなもの」というテーマで撮った写真をプロの写真家に評価していただく「写真コンテスト」など様々なイベントが開催されました。

若桐祭直後の子どもたちの日記には、「来年の若桐祭が楽しみです」という言葉が多くありました。附属小伝統の行事である若桐祭が、子どもたちのためにこれからも発展することを願っています。





第9回「科学の芽」賞 表彰式・発表会について

附属学校教育局 教授 松本末男

12月20日(土) 本学大学会館ホールにおいて、朝永振一郎記念第9回「科学の芽」賞の表彰式・発表会を開催しました。

「科学の芽」賞は、筑波大学にゆかりのあるノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士の功績を称え、それを後続の若い世代に伝えていくとともに、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールです。

今回、国内の学校 168校及び海外 9か国(中国、メキシコ、タイ、シンガポール、ドイツ、イタリア、ハンガリー、オーストラリア、ポーランド)の日本人学校から小・中・高校生部門合わせて2,155件の応募がありました。その中から小学生部門8件、中学生部門8件、高校生部門2件の合計18件の作品(うち団体作品1件含む。)を極めて優秀と認め、「科学の芽」賞を授与しました。

表彰式・発表会には、受賞者18名が出席されました。そのほかにも受賞者のご家族や学校で指導いただいた先生方など多数の方々も出席されました。

本学からは、永田恭介学長をはじめ、阿江通良副学長、三好康郎副学長、BENTON Caroline Fern副学長、吉川晃副学長、東照雄副学長、大田友一副学長、松村明副学長、石隈利紀副学長、佐藤総一郎監事、池田潤学長補佐室長、金谷和至数理物質系長、及び「科学の芽」賞実行委員会委員などが出席し、総勢で100名を超える出席者となりました。

表彰式は、「科学の芽」賞実行副委員長である松本末男附属学校教育局教授の開会の挨拶で始まり、次に永田学長から各受賞者に表彰状と記念の楯の授与と祝辞がありました。続いて、部門毎に受賞者の発表会と審査に携わった附属学校教員及び大学教員による作品の講評が行われ、最後に「科学の芽」賞実行委員長の石隈副学長の総評がありました。発表会では、スクリーンに作品の概要を投影しながら研究の成果を報告したり、司会者からの質問に身振り手振りを交えて受け答えをしていました。その後、同会館のレストランにおいて懇談を催しました。

懇談では受賞者のご家族や、学校の担任の先生、副学長からも感想をいただき、終始和やかな表彰式・発表会となりました。

ご応募いただいた皆様、関係者各位に深く感謝を申し上げますとともに、来年度の「科学の芽」賞もどうぞよろしくお願い申し上げます。



●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事来歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。

ポローニア
paulownia
vol.32

発行日……平成27(2015)年 2月28日

発行者……附属学校教育局教育長 石隈利紀

発行所……筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚 3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン……スピーチ・パルーン

印刷……広研印刷 使用紙:U-Itimax [日本製紙]

